

紫の上終焉の〈語り〉と〈呼称〉

―共感する語り手の〈声〉・「紫の上」「若紫」へ―

東原 伸明

1 語り手の共感の〈声〉と〈呼称〉

「御法」巻は『源氏物語』の第四〇巻目、第二部の世界の終わり「幻」巻のひとつ前に位置する。

紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなくなやみわたりたまふこと久しくなりぬ。

(小学館新編全集4 493頁)

と、巻頭の言説が叙述しているように、紫の上の発病からその死と光源氏の悲嘆とを語っているのだが、この巻じたいは特に劇的なドラマや葛藤はなく、語り手は死にゆく彼女を季節の移ろいに寄せて淡々と語ってゆくだけである。

「御法」巻は従来秋山虔によって、紫の上の《その最後の生の日々を最大級に美化して語らねばならなかった》などというふうの説かれている^①。

この《最大級》の《美化》という秋山の観点を、死にゆく紫の上をめぐる言説そのものに求めた池田和臣は、

和歌の多出とか歌語のちりばめとかではない、御法巻の特異な表現構造に思いつくに至ることになる。それは、語り手の情意によって、物語の深酷な状況、作中人物の重苦しい心中を受けとめる表現構造であり、これによって御法巻は、紫上の弧愁Ⅱ解体する内的時間をくいと止め、その死を美化し得たのである。

そして、この語り手の情意に収束する表現構造は、いわゆる草子地Ⅱ物語文学が様式として持つ語り文体を、語り手の構造を、最大限に活用したものであった^②。

という。池田は具体的には、「あはれ」等の情意語が語り手によって多用されていることを例示して指摘しているのだが、《語り手の情意に収束する》というあり方がなぜこの巻に特異な現象であるかという点、「鈴虫」「御法」「幻」という三巻、一連の流れにおいて「鈴虫」「幻」の二巻には、それがほとんど見られないということによる。紫の上の死によって悲嘆に暮れる光源氏は、《語り手の情意で支えられることはな》く、

今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をへと、ひたみに思し立つことたゆみなし。されど人聞きを憚りたまふなん、あじきなかりける。

(「御法」4 518頁)

と、度し難い俗物としてむしろ、語り手からは非難されている始末なのである。池田和臣が《語り手の、紫上と源氏それぞれに対するかわり方は、きわだった対照をみせている》という指摘をしている所以である。

池田のいう《語り手の情意》を、私はここでは〈共感〉ということばに置き換えて理解してみたいと思うのである。語り手の共感、しかしてそれは如何なるところに見出しうるのか。

秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては御心地もいささかさはやぐやうなれど、なほともすればかごとがまし。さるは身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、露けきをりがちにて過ぐしたまふ。

中宮は、参りたまひなんへとするを、「いましばしは御覽ぜよ」とも聞こえまほしう思せども、さかしきやうにもあり、内裏の御使の隙なきもわづらは

しければ、さも聞こえたまはぬに、あなたにも渡りたまはねば、宮ぞ渡りたまひける。かたはらいたけれど、げに見たてまつらぬもかひなしとて、こなたに御しつらひをことにせさせたまふ。

こよなう痩せ細りたまへれど、へかくてこそ、あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれと、来し方あまりにほひ多くあざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられたまひしを、限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似るものなく心苦しく、すずろにもの悲し。

(501～502頁)

死を目前にしての紫の上衰退の描写である。内裏に帰還しようとする明石の中宮に対し、死期を自覚した紫の上は今生の別れを悟つてか、彼女をもうしばらく引き止めておきたい思っているという場面である。視点人物である明石の中宮の目を通して養母紫の上の衰弱した姿が語られているのだが、しかし、この場面の叙述はそれだけではなくて、ここを語る語り手の「声」とズレながら二重化していることに注意しておきたい。

登場人物の心の中の声を、従来、「心中思惟」とか「心内語」・「内言」・「内話」などと呼んできた。ここでは「内話文」という術語で呼ぶことにする。近現代の注釈史・研究史を辿ってみても「会話文」は、鉤括弧「」で括るという方法が確立していたのに対して、内話文はその存在すら等閑視されており、それを指示する記号もなかった。だが、ここ十年余りの物語文学研究、とりわけ古注の言説の区分を再評価し、欧米の研究事情にも明るい三谷邦明の一連の研究などが内話文の存在に注目し照明を当て続けてきた³⁾。その三谷の言説分析では、内話文に山形の括弧「」を付して地の文や会話文から区別することが提案され

ており、賛同する研究者の間で徐々にではあるが実践されるようになってきた。そこで小稿でも、引用した本文の内話文には山形括弧「」を付し、句読点なども所によっては私に改めている。

さて内話文と会話文、今日そのどちらも括弧で括られているように一人称の直接言説として認識されているのだが、内話文は登場人物の心の中の「声」であることから、音声の無い独白、モノローグとしてある。会話文が対話、ダイアログとして相手の人物に聞こえる相互交通の言説であるのに対して、内話文は相手には聞こえない、その意味では一方通行の言説である。それは内話文が聞き手の存在を前提としては発話されていないことにより、自己の心の中の真実の素直な叫びとして表出することができからである。相手、聞き手の存在を前提とする会話文は、したがって必ずしも発話者の心の真実を語ってはいない。自己の立場を保つために、時に嘘をも含むことになるのである。会話文は額面どおりには受け取れない信用のおけない言説、対して内話文は、発話内容をほぼ信用してもよい言説という区別をすることができる。登場人物が悩み、とても人には相談出来ない内容の箇所は、独白としての内話文が頻出、多用されることになり、会話文としては表出されないのである。

ところで、

中宮は、参りたまひなん」とするを、……

という言説の、「参りたまひなん」の前に内話文の開始を意味する符号の「」が付けられていないのは、なぜか？むろん私が付け忘れたからではなく、「参りたまふ」という待遇表現は、この場面を語る語り手による間接的なものであり、端的にいつ「参りたまひなん」という言説自体は内話文とはいえないからである。純粹に内話文であるためには敬語という、第三者からの待遇表現は邪魔で

ある。明石の中宮の帰宮という行為に対して、第三者である語り手の付した待遇表現が謙讓十尊敬の「参りたまふ」であり、加うるに「なん」は、明石の中宮の決意を示すものである。この言説には帝と明石の中宮の身分差を慮る語り手が介入しているのである。「参りたまふ」は、語り手が間接的に地の文から明石の中宮の動作を待遇したものである。だから厳密には、明石の中宮の内話文の始発とはいえない。あくまでも地の文である。そのくせ、「とするを」の「と」という付加節の機能によって内話文の終了の位置だけは確定されているのである。したがってここは地の文から内話文への「移り詞」の一例と理解して、あえて開始の「へ」を付けなかったのである。

げに見たてまつらぬもかひなし」とて、……
も同様の理由による。始発の部分の無い、地の文から内話文へと移っている言説の例ということになる。

さて、ある意味においては当然の事態をこんなにも長々と述べてきたのは、実は次の理由による。

この場面を締め括る傍線部、

すずろにももの悲し。

という叙述は、果たして誰の発話なのだろうか。

たとえば新編全集の現代語訳は、

ただ無性にももの悲しく感ぜられる。

としている。

しかし、「すずろにももの悲し」は、果たして「ただ無性にももの悲しく感ぜられる」という体のニュアンスであろうか。むしろ、私は現代語訳の批判をしようというというわけではない。そうではなくて、「すずろにももの悲し」という言説は、

現代語訳という翻訳的行為をし難い言説なのではないか、ということをもむしろ指摘したいのである。「すずろにももの悲し」は言い切りの直接言説的なニュアンスであって、「感ぜられる」という間接言説のニュアンスではない。だが、現代語訳を言い切りのかたちに直訳してしまうと、現代語としては落ち着きが悪い。締め括られた感じがしないのだ。ここには現代語の表現性の限界という問題がある。

それはそれとして、「すずろにももの悲し」は言い切りの直接言説的なニュアンスであるとするならば、なぜ直接言説である内話文として表出されていないのだろうかという疑問が、次に湧いてくる筈である。すなわち、

へすずろにももの悲し」と思ひたまふ。

あるいは、

へすずろにももの悲し」と御覽す。

などというかたちにもなっていてくれたならば、もっと翻訳に現代語訳しやすかった筈であるが。そして、おそらく山形括弧で括られた内話文のようになっていたならばよかったのであるが。しかし、そうなっていないことによってこの言説の特性、存在意義が理解されよう。

「すずろにももの悲し」は、明石の中宮という登場人物の一人称的な独白、モノローグであると同時に、この場面の地の文を語る語り手の三人称的な対話、ダイアログなのである。つまり、「すずろにももの悲し」という一文には、登場人物である明石の中宮のへ声に、地の文を語る語り手のへ声^①が二重に重なって、複合して響いているのである。二声の言説なのである。これは「自由間接言説」と呼ばれている^②。一文において登場人物と語り手という二つの立場を共有している、この自由間接言説のニュアンスを翻訳することは至難であるというよりも、

ほとんど不可能なことではないだろうか。そのことはたとえば新潮日本古典集成の当該個所の傍注が、

わけもなく無性にもの悲しい

という言い切りのスタイルの直訳的な現代語訳をとっているからといって事の解決に根本的に寄与しているわけではないことは、申すまでもない。

さて、前述したように「御法」巻は、

紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなくなやみわたりたまふこと久しくなりぬ。

(493頁)

という一文をもって開始されている。ここで私が注目したいのは、紫の上の、「紫の上」という呼称である。

通常呼称というのは、物語の中、本文の状況の変化に応じた実態に即した用いられ方をしているものと、後世の読者が名付けたいわゆる通称と、その二様をいう。「紫の上」という呼称は、あまりにもポピュラーであるがゆえに後者の通称の印象が強く、前者の物語本文の状況の変化に応じた実態に即した用いられ方だという実感はほとんどないのではあるまいか。しかし、「紫の上」という呼称は、後述することになるが、実はそれほど一般的なものではなく、むしろ珍しいのである。

「若菜上」巻女三の宮の降嫁に始まる第二部の世界において、彼女の呼称は「紫の上」ではなくて、一般的には「対の上」なのである。あるいは、

わが御殿と思す二条院にて、その御設けはせさせたまふ。

(「若菜上」493頁)

などという叙述もあることから、むしろ「二条の上」ないし、「二条院の上」な

どの呼称が想定されるのであって、「紫の上」ではないのだ。だからこの「御法」の巻頭も、

対の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、……

でもよかつたし、あるいは、

二条の上、いたうわづらひたまひし御心地の後……

ないしは、

二条院の上、いたうわづらひたまひし御心地の後……

でもかまわなかつた筈である。にもかかわらず、物語が「紫の上」という呼称を、あるいは「紫の上」と称呼する語り手を選択したこと、そのことの意味を小稿は重く受けとめたいと思う。

そのことは端的にいうと、「対の上」でも「二条の上」でも「二条院の上」でもなく、彼女は、まさに「紫の上」として死の瞬間を迎えたことを意味している。このことはむろん、前出の《最大級》の《美化》という観点にもかわることはないまでもない。《美化》とは《騙り》にほかならず、語り手はまた、騙り手であることを忘れてはならないだろう。

2 死の場面と「若紫」の時点への回帰

さて、「紫の上」という呼称を考えるうえで、その『源氏物語』初出の例はまさに暗示的であるといわねばならぬであろう。

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。くまの物語の絵にてあるを、「いとよく描きたる絵かな」とて御覧す。小さき女君の、何心もなく昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女

君は見たまふ。

〔蚩〕324頁

この散佚「くまの物語」の絵の幼い女主人公に彼女は、幼女時代の自己を同化・投影している。その場面において、「紫の上」と称呼されているのである。しかも「何心もなくて」と絵の中の女君を、この場面を語る語り手は形容している。「何心なし」は、紫の上が物語に初めて登場してきた「若紫」巻以来の、初期の彼女を形象するキーワードであることは藤井貞和の論を始めとし、原岡文子や三田村雅子の論稿などによって追認されていることでもある。

鈍色のこまやかなるがうち姿えたるども着て、何心なくうち笑みなどしてゐたまへるがいつつくしきに、我もうち笑まれて見たまふ。

〔若紫〕1257～258頁

その「何心なし」というキーワードがまた、彼女の死の場面の形象に用いられていることは注目されてよい。

灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかううち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、へ飽かぬところなしと言はんもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、へ死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや。

〔御法〕550～510頁

紫の上の死を語る場面は、夕霧の目を通して語られているのだが、この「何心なし」に藤井貞和は「若紫」巻の紫の上の形象との呼応を指摘し、そこに藤井は彼女の死に際しての《物語のなかのほとんど唯一の救済》を読みとつている。

この藤井貞和の論を支持する松井健児も、《われわれは、死の時にさいしての、紫の上の始原の時への回帰と、そのありえたかもしれない「救済」をすら幻視す

ることとなる》といい、《紫の上の死顔の喚起する印象を、「何心なし」という肯定的な清浄さへと、あえて差し向けようとする、物語の志向性はやはり尊重されなければならない》と述べている。

してみると「御法」巻の《語り》は、紫の上の死を彼女の初期の「何心なき」無垢な姿態に回帰させることによって、「救済」へと《美化》し得たのだといえようか。童女に回帰して無心なままに往生したのだと……。

紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなくなやみわたりたまふこと久しくなりぬ。

〔同493頁〕

上は、御心の中に思しめぐらすこと多かれど、さかしげに、亡からむ後などのたまひ出づることもなし。

〔同501頁〕

繰り返すが、彼女は「紫の上」として死んだ。「紫」+「上」の呼称は、「紫」が彼女を「若紫」としての幼女期の「何心なき」無垢な魂の状態に回帰していることを指示しているもの、その象徴として理解すべきであろう。

「御法」巻を語る語り手は、彼女のことを「紫の上」・「上」と称呼した。そう称呼する語り手は、彼女の身近に侍り、彼女の行動に一喜一憂し、彼女の生に共感した語り手であると思われる。その死に際しては「紫の上」として《最大級》の《美化》となる《語り》をした。だから、「紫の上」という呼称も、「（我が紫の上）あるいは、「（我々紫のゆかりの）上」の謂いなのではないだろうか。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、

いづれはまことならむ。

〔竹河〕 559頁

「竹河」巻頭の草子地である。「竹河」巻は、「紅梅」巻と同時代を語ったいわゆる並びの巻で、光源氏の一族とは疎遠な故鬚黒太政大臣邸に仕えていた老女房が問はず語りに語ったものが、この巻の情報源となっているという。「紫のゆかり」が語った従来の物語の伝承とは内容が異なっており、この老女房の主張するところによれば、むしろ紫のゆかりのへ語りの方が間違っており、その理由は自分よりも歳取って惚けてしまった者が語っているからではないか、というのだ。「いづれはまことならむ」は、その主張を受けて、この巻を語る語り手の韜晦である。

この草子地から導かれてくることは、『源氏物語』の語り手には少なくとも二つの立場があり、一つは「紫のゆかり」の語り手であり、もう一つは前者を相対化する語り手がいるということである。これはとても示唆的なことではないだろうか。

かなり大雑把で乱暴な物言いになってしまいが、『源氏物語』全体を紫のゆかりの語り手たちとそれを相対化する語り手たちという二つの立場、視座から眺め直してみたらどうであろうか。否、『源氏物語』全体は、語弊があるから、ここでは紫の上の呼称に関わる問題に限定して、というべきであろうが……。

3 「上」という呼称の本来的な意味

それでは手続きとして、まず「上」という呼称について再度確認と検討をしておくことにしよう。

私事で恐縮であるが、「上」とは、漠然と「貴人の正妻」を指示した語という

程度の理解から、多年教室でも授業の折そのように申し述べてきた。それは、手許にある辞典類にもそのように記されていたという理由による。

④貴婦人、特に貴人の妻。奥方。竹取「離れ給ひし元の」は。源若紫「君はーを恋ひ聞え給ひて泣きふし給へるに」⑤貴人の妻の呼称の下につける語。「葵のー」(広辞苑)

「貴人の正妻。北の方。」はなれ給ひしものうへは腹をきりて笑ひ給ふ」〔竹取〕「御使のさま物ぐるほしうて、うへ俄にやませ奉り給ふ」〔宇治拾遺・一・一八〕「九条右大臣へ道家のうへは、この大臣の御女なり」〔増鏡・新島守〕(角川古語大辞典)

この稿を執筆するにあたって、従来の理解は私の思い込みとして大いに反省し改めなければならないことに気づかされた。汗顔の至りである。

そのことを私に気づかせてくれたのは、清水婦久子の「源氏物語の人物呼称―「うへ」と語りの問題―」という論文である^⑥。今日のへ語りへとへ言説という視座に直結する思考から呼称を扱ったものとしては先駆的で、この方面の必読論文であるといえよう。

清水論文は、「上」の辞書的な意味が前掲のように貴人の妻や北の方に傾斜しているのに対して、『源氏物語』など物語類においてその説明は必ずしも合致していないことを指摘し、手始めに『うつほ物語』『落窪物語』の用例を検討することから〈両物語において、女君を示す「うへ」は地の文に見当たらず、会話のみに見られる。(……)これらの例を見る限り、「うへ」に当たる女君が貴人の妻や北の方であることに違いないが、「うへ」の用いられている意味は、妻であることより、一家の主婦としての立場に関係があるように思える。女房が女主人に対して、子供が母親に対して用いる敬称であって、貴人の妻としての地位を示す

客観性は希薄である。両物語の会話にあつて地の文に見当たらないのも「うへ」のこうした性格によるものと考えられる」としている。

この考察の帰結は、『源氏物語』の会話文・内話文における「上」の例にも適用される。①玉鬘に仕えていた三条の会話文において、彼女は夕顔のことを「上」と呼んでいること（「玉鬘」巻）、また、②末摘花の叔母、大弐の北の方の内話文で末摘花の亡き母親を「上」としていること（「蓬生」巻）、および、③一条御息所が娘の落葉宮、女房の少将らによって「上」と呼ばれていること。さらに、④真木柱の夫である紅梅大納言が彼女の連れ子、宮の御方に向かつて真木柱のことを「上」と呼んでいること（「紅梅」巻）などである。

①玉鬘に仕える女房にとつて主人の母親は、貴人の正妻であるか否かを問わず「上」と呼ぶべき人物である。②妹である大弐の北の方の立場から姉に対しての敬称。③落葉宮の母上であり、一家の主婦。④宮の御方の母上、というように貴人の正妻であるか否か以前に、『主従関係や母子関係による主観的な性格の強い敬称である』と清水論文は説いている。

さらに清水論文は『主観的な文章の代表』として『枕草子』『紫式部日記』を指摘し、これらにおいて特定の語り手である清少納言と紫式部から「上」と呼ばれる人物は、それぞれ定子の母貴子と彰子の母倫子に特定されているのも、道隆ならびに道長の正妻であるという理由からではなく、清少納言と紫式部の出仕する邸宅の女主人だからであり、定子、彰子の母親、母上という意味の敬称だからと考えるべきだとしている。

以上、清水論文の考察から導かれることを言説論的に理解し直してみると、「上」というのは、あくまでも「場」に規定される語であり、発話する人物の主観的立場から（聞き手に向つて）対象を、その瞬間において自己の私的立場にお

ける主人（的な人物）として規定している主観的な語だということになる。すなわち「上」は、「上」と称呼する発話者にとつては「上」であつて、そうではない者にとつては「上」でもなんでもない、ということになる。きわめて相対的な存在であつて、絶対ではないのだ。

4 呼称「対の上」とその公的性格

紫の上が語り手から主人という意味の敬称である「上」という呼称で遇された初出の例は、「蓬生」巻頭である。ただしそれは、「二条の上」という呼称であつた。

藻塩たれつわびたまひしころほひ、都にも、さまざま思し嘆く人多かりしを、さてもわが御身の扱ひどころあるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、
二条の上などものどかにて、旅の御住み処をおぼつかならず聞こえ通ひたまひつつ、……
〔「蓬生」232頁〕

そしてすぐに、「対の上」という呼称も初めて出現する。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上^レに御暇聞
こえて出でたまふ。
〔同344頁〕

「二条の上」・「対の上」の呼称は、光源氏の須磨下向に際し、二条院が紫の上^レに託されたことにより、そのように称呼する語り手から彼女が実質的に女主人として認知されたことを意味しよう。しかし、単に「上」と称される場合と、「二条の上」・「対の上」とでは、語り手と対象との心理的距離は遠近法的に異なるであろう。前者は近く、後者は遠い。したがつて、前者と後者とでは語り手が異なるという考え方も十分成り立つのであるが（清水婦久子前掲論文）、今はそれにつ

いては言及しないでおく。ちなみに彼女が単に「上」と呼ばれるようになったのは、後の明石の中宮、明石の姫君を引き取り、その養母、母親、「母上」となった時点においてである（『薄雲』巻）。以後コンスタンスに「上」と呼ばれるようになる。

さて、「対の上」という呼称は、紫の上の人生を通して彼女の地位を指示し規定する、何よりも重要な呼称であったと思われる。このことは平安朝の史的婚姻制度と関わる問題であり、工藤重矩の唱える「一夫一正妻多妾制」という捉え方が、従来の「一夫多妻制」という曖昧な認識などよりは、歴史的事実としては正しいと思われる¹¹。

紫の上は、対世間的には光源氏の「妾」的存在であり、「正妻格」ではあっても「正妻」ではない¹²。こうした制度上の問題が主題として問われる時に、「対の上」という呼称は、彼女の対世間的な地位を照らし出し、彼女の苦悩を紡ぎ出すものとして意味をもってくるのである。

世の中に漏りきこえて世人「前斎院、ねんごろに聞こえたまへばなむ、女五の宮などもよろしく思したなり。似げなからぬ御あはひならむ」など言ひけるを、対の上は伝へ聞きたまひて、しばしは、へさりととも、さやうならむこともあらば隔てては思したらじ」と思しけれど、うちつけに目とどめきこえたまふに、御気色なども例ならずあくがれたるも心憂く、へまめまめしく思しなるらむことを、つれなく戯れに言ひなしたまひけんよ」と、へ同じ筋にはものしたまへど、おぼえもあべいかな。年ごろの御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて、人に押し消たれなむこと」など、人知れず思し嘆かる

〔朝顔〕2478~479頁

第二部世界、女三の宮降嫁の帰結として彼女の「出家」の願望とその苦悩の様

が語られている叙述にも、「対の上」という制度を指示する呼称が用いられていることは、注意されるところである。

対の上、かく年月にそへて方々にまさりたまふ御おほえに、へわが身はただ一とごろの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな」と、たゆみなく思しわたれど、へさかしきやうに思さむ」とつつまれて、はかばかしうもえ聞こえたまはず。

〔若菜下〕417頁

また、この「対の上」という呼称が地の文に語り手からのみならず、会話文においてもそう称呼されていたこと、世間周知の呼称であったことを確認しておきたい。

世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあたりのことは、言ひあつかふものなれば、はじめつ方は、「対の上」いかに思すらむ。御おほえ、いとこの年ごろのやうにはおはせじ。すこしは劣りなん」など言ひけるを、……

〔若菜上〕492頁

ところで、「対の上」という呼称は、本来「二条院の西の対の屋の主人」というほどの意味の呼称であるから、六条院が造営され（『薄雲』巻）、二条院の西の対の屋から六条院の春の町の寝殿に移転して以後彼女には、「春の上」などの呼称が一般に用いられるようになる。ところが、『梅枝』巻では未だ彼女の居所が六条院の春の町にあるにもかかわらず、なぜかまた、「対の上」の呼称が復活しているのである。

対の上の御は、三種のある中に、梅花はなやかにいまめかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。

〔梅枝〕3409頁

『源氏物語』自身のケアレミスミスなのかと思うと、そうではなく以後繰り返し

この呼称が用いられているのである。紫の上と光源氏の御阿礼祭り見物の場面でも、

5 「最愛の女性」との一連托生願望

かくて六条院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。対の上、御阿礼に詣でたまふとて、例の御方々いざなひきこえたまへど、なかなかさしもひきつづきて、心やましきを思して、誰も誰もとまりたまひて、ことごとしきほどにもあらず、御車二十ばかりして、御前などもくぐだしき人数多くもあらず、事そぎたるしもけはひことなり。

〔藤裏葉〕 3 446頁

とあり、また、明石の姫君の入内と子息夕霧の婚姻も決まり、宿願を果たしたと思う光源氏が出家の志を独白する場面においても、

へ今は本意も逃げなんと思しなる。対の上の御ありさまの見棄てがたきにも、宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり。

〔藤裏葉〕 3 453頁

とある。したがって紫の上は「梅枝」巻の時点で、すでに六条院の春の町の寝殿からその西の対の屋に移って、六条院においても、「対の上」という呼称が定着していたらしいということである。

こうした現象について玉上琢彌は、来る第二部世界、女三の宮降嫁の物語の構想の伏線として捉えている^⑧。構想云々はともかくとして、「対の上」という呼称は、「世の中の人」からも称呼されていた、いわば公式・公認の呼称であり、彼女の対世間的な身分・地位を露骨に指示したものであった。「梅枝」・「藤裏葉」巻という光源氏栄華の頂点の物語において、繰り返し「対の上」と称呼されるということは、第二部「若菜上」巻以前に彼女の存在は、すでに相対化されてしまっていたということ、その証しでもあろう。だから紫の上は、「対の上」ではあっても、「紫の上」ではないのだ、公式には。

『源氏物語』という物語文学は、習俗を含む歴史社会的な制度の中で執筆されていることは間違いないが、しかし物語自身が語ろう（↓騙ろう）としているのは、そのような「制度」への順応ではあるまい。その意味では前掲工藤重矩と藤井貞和との間でなされた婚姻制度をめぐる論争は、両者の「正妻」という制度自体への過剰なこだわりが、かえって物語自体の語ろう（↓騙ろう）とする姿勢を暈かしてしまったような気がしてならない^⑨。そのことについて、少しだけ言及しておきたい。

契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ある露の心へだつな

〔若菜下〕 4 245頁

これは病い小康を得た紫の上が蓮の花が咲き渡っているのを見て、消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを

（同頁）

という贈歌を詠じたのに対する、光源氏の返歌である。「蓮の露」のように果敢ない我が命だと悲観する女に対して、男は「蓮の露」のようにあの世においても一連托生であることを約束しようと切り返しているのである。この光源氏の一連托生の願望は、「御法」巻の冒頭の言説において再度確認されている。

「後の世には、同じ蓮の座をも分けん」と契りかはしきこえたまひて、頼みをおかけたまふ御仲なれど、……

〔御法〕 4 494頁

さらに紫の上の死後、光源氏が仏道修行の場面でも、

今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をへと、ひたみちに思し立つことたゆみなし。

（同518頁）

とあった。

藤井貞和は、『一蓮托生は誰のものか』「三途の川をだれと渡るか」という問いを發し、塚原明弘の論文に拠つて⁵⁾、女性は死後最初に関係を持った男性に背負われ三途の川(＝三瀬川)を渡るといふ俗信を紹介しつつ、『三瀬川を渡るだけなら、女三宮も、明石の君も、朧月夜も、末摘花も、源氏が引き受けて渡らせることに不都合はそんなにならう。塚原氏は女三宮源氏関係について、夫婦間の信頼が一蓮托生の必要条件であつたとする。たぶんそういうことでよいとして、一蓮托生は一人だけ選抜される、それが正妻ということにならう』とし、前掲紫の上と光源氏の贈答歌から一蓮托生の叙述を根拠に、『これらはまさに正妻であることの確認だと知られる』という。

しかし、これは「正妻」という「制度」に思考を呪縛されてしまったための合理解であり、本末転倒の論理ではあるまいか。「対の上」という対世間的評価を「御法」巻に収斂する、死にゆく紫の上の物語においては、それを如何に《美化》して語るか(↓騙るか)ではないのか。ならば物語としては「正妻」という制度に絡め取られるのではなくて、制度を如何に超越するかである。紫の上Ⅱ「最愛の女性」との一蓮托生こそが物語の創り出した虚構の思想と論理であり、「御法」巻のテーマであらねばならないだろう。彼女が「正妻」であろうが、あるまいがである。

注

(1) 秋山虔「光源氏的世界の終焉」『源氏物語』岩波新書一九六八年。

(2) 池田和臣「紫上終焉の方法」『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院二

〇〇一年。

(3) 三谷邦明『物語文学の言説』有精堂一九九二年。三谷編『源氏物語のへ語り』と『言説』有精堂一九九四年。「源氏物語の言説分析」『源氏物語の表現と文体上 源氏物語研究集成 第三卷』風間書房一九九八年一月など。

(4) 「移り詞」は江戸時代末期の国学者、中島広足が随筆『海人のくゞつ』で用いている術語。池田節子「移り詞」秋山虔編『別冊国文学源氏物語事典』一九八九年五月参照。

(5) 東原伸明「研究史 源氏物語のへ語り」と『物語文学史の論理語り・言説・引用』新典社二〇〇〇年。東原「自由間接言説の本質とは何か」『國文學』二〇〇〇年二月。東原「物語文学言説の動態的分析」物語研究会編『物語研究』二〇〇一年三月。

(6) 藤井貞和「光源氏物語主題論」『源氏物語の始原と現在―定本』冬樹社一九八〇年、砂子屋書房一九九〇年。原岡文子「紫の上の登場」『日本文学』一九九四年六月。三田村雅子「源氏物語のジェンダー」『解釈と鑑賞』二〇〇〇年二月。

(7) 注(6)の藤井貞和論文。

(8) 松井健児「紫の上の最期の顔」『源氏研究』第6号翰林書房二〇〇一年三月。

(9) 塚原明弘「紫の上の死と葬送の表現」『中古文学』第五十三号一九九四年五月、「御法巻と二十五三昧会」『國學院雑誌』一九九四年八月、「死を見つめる心」『國學院雑誌』一九九五年一月など塚原の一連の論稿が、そうした視座から説いている。

(10) 清水婦久子、中古文学研究会編『論集中古文学5 源氏物語の人物と構造』笠間書院一九八二年、「源氏物語の風景と和歌」和泉書院一九九七年所収。

- (11) 工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』風間書房一九九四年。ただし、東原伸明「源氏物語研究の新しいテーマ集50」『國文學』一九九九年四月の「1. 源氏物語の内なる婚姻制度とは何か。」は、工藤の論が源氏物語の「内なる婚姻制度」じたいを説いてないことを批判している。
- (12) 中野幸一「紫の上の妻の座とはいかなるものであったか」『國文學』一九八〇年。
- (13) 玉上琢彌『源氏物語評釈 第五卷・六卷』角川書店一九六五年
- (14) 藤井貞和「正妻候補者たち」『源氏物語論』岩波書店二〇〇〇年。注(11)の工藤重矩の著書、および工藤「婚姻制度と文学」『國文學』二〇〇〇年二月。
- (15) 塚原明弘「三瀬川を渡る時」『王朝文学史稿』20、一九九五年。